

『黒潮行進曲』の誕生—戦時期和歌山のメディア・イベント—

官田光史（関西大学 文学部）

1 メディア・イベントとしての歌詞懸賞募集

メディア・イベントとは、さしあたり新聞社や放送局など、企業としてのメディアによって企画され、演出されていくイベントのことである（吉見俊哉「メディア・イベント概念の諸相」）。そうすると、私たちの頭には高等学校の野球大会（センバツ、夏の甲子園）や囲碁・将棋のタイトル戦などがすぐに思い浮かぶだろう。そのようなイベントの一つとして、新聞社などによる歌詞懸賞募集も挙げられる。この懸賞募集については、まとまった形で扱った研究が管見のかぎり見当たらないが、朝日新聞記事データベース『聞蔵Ⅱ』を検索すると、1900年ごろには行われていたことがうかがえる。その当選歌に人々が触れる機会は、実演に限られていた当初から、SPレコードの普及に伴って、その他の音楽のジャンルと同様に飛躍的に増えていったはずである。

ここで、松本コレクション中の懸賞募集当選歌を確認しておこう。表1はコレクションのデータベースを「懸賞」などの語句で検索した結果をまとめたものである。コレクション中の懸賞募集当選歌は全15作品。その大半は戦前・戦中期（1930年代～40年代前半）のものである。松本正美氏のお住まいが伊丹市であったためか、神戸市民祭協会が募集した作品も見受けられる。これらの多くについては、インターネットで少し調べれば、募集の経緯も含めて、ある程度の情報を収集することができる。そうしたなか、『黒潮行進曲』に関しては、インターネット上で図1のレーベル以上の情報がほぼ見当たらなかった（レーベルには、この作品が「大阪毎日新聞社懸賞募集当選歌」であること、作詞・作曲者、演奏者の氏名などが記載されている。以下、大阪毎日新聞社・大阪毎日新聞は大毎と略）。実際、そのような作品が、約4000枚にのぼる松本コレクション中には多く含まれているのではないだろうか。これらのことを踏まえつつ、懸賞募集当選歌としての『黒潮行進曲』の誕生について、ささやかな調査を試みてみたい。



図1 『黒潮行進曲』のレーベル

表1 松本コレクション中の懸賞募集当選歌

楽 曲 名	募集の主体等	作詞・作曲等	発表年
東京祭	読売新聞社	門田ゆたか作詩、西條八十補筆、古賀政男作曲	1933年
大大阪祭	大阪商工祭協会協賛、夕刊大阪新聞	北原白秋選、岡田千秋作詞、佐藤惣之助補作、江口夜詩作編曲	1933年
第一回神戸「みなとの祭」主題歌 みなと音頭	神戸市民祭協会	岸本梅路作詩、野口雨情補作、宮本啓一作曲	1933年
神戸「みなとの祭」主題歌 みなと 神戸行進曲		岸本梅路作詩、富田碎花補作、秋山完一作曲	1933年
新興キネマ映画『新しき天』主題歌 南海子の歌	東京日日・大阪毎日新聞社	若杉雄三郎作詩、江口夜詩作編曲	1933年
新興キネマ映画『新しき天』主題歌 母なし千鳥	東京日日・大阪毎日新聞社	奥昌翠楊作詩、江口夜詩作曲、奥山貞吉編曲	1933年
第二回 神戸 みなと音頭	神戸市民祭協会	平川六郎作詩、近藤十九二作曲	1934年
第三回 港の祭の歌 神戸音頭	神戸市民祭協会、神戸市役所観光課	西條八十選、高橋重雄詞、宮本啓一作編曲、花柳芳次振付	1935年
第四回 神戸 みなとの祭の歌	神戸市民祭協会	時雨音羽選歌、大村能章作編曲	1936年
興亜行進曲	朝日新聞社、陸海軍・文部三省後援	今沢ふきこ作詞、福井文彦作曲、橋本國彦編曲	1940年
黒潮行進曲	大阪毎日新聞社	西川好次郎作詞、深海善次作曲	1940年
東宝映画「蛇姫様」主題歌 蛇姫絵巻	東京日日新聞社	古賀政男作編曲	1940年
楽しい満洲	満洲新聞社	古賀政男曲、仁木他喜雄編曲	1941年
小島通いの郵便船	雑誌「平凡」	上尾美代志作詞、平川英夫作曲	1955年
恋の蛇の目傘	雑誌「平凡」	戸枝ひろし作詞、万城目正作曲、松尾健司編曲	1955年

2 『黒潮行進曲』の基本情報

この場合、まず調査すべきは『毎日新聞百年史』をはじめとする毎日新聞の社史である。社史では1933年の『爆弾三勇士の歌』の懸賞募集などが触れられていたものの、『黒潮行進曲』の名前を見つけることはできなかった。そこで、次に作詞者の西川好次郎に目を向けた。西川には『山びこよ雲にのれ』と題した伝記が刊行されていた。さっそく取り寄せてみると、西川好次郎（にしかわよしじろう、1903～90年）は和歌山県日高郡寒川村（現・日高川町）出身の小学校教員、アマチュアの作詞家で、日中戦争期の1940年に大毎和歌山支局による『黒潮行進曲』の歌詞懸賞募集に応募して、当選していたことが分かった。年代は別にして、地域については「黒潮」という言葉から、ひらめくべきであった。もちろん、黒潮の恵みを受ける鹿児島県、宮崎県、大分県、高知県、三重県あたりも候補となり得るが、松本コレクションの地域性を考慮すると、和歌山県には納得である。

次に調査すべきは、なぜ『黒潮行進曲』なる作品が生み出されたのかということである。この点は西川の伝記にも言及されていないので、和歌山県立文書館に赴いて『大阪毎日和歌山版』の調査を行った。同館の閲覧室に配架されている同紙の製本をめくっていると、1940年7月の紙面に図2の広告を発見した。『黒潮行進曲』の歌詞懸賞募集は和歌山県、新宮市、大毎の共催であり、応募先が同社の和歌山支局とされていた。選者は県知事、新宮市長、新聞社の関係者である。そのなかに当時は東京日日新聞社の学芸部長で小説家の久米正雄も含まれており、目を引く。賞金は当選歌が300円で佳作が50円である。

それでは募集の趣旨から、肝心の『黒潮行進曲』が生み出された理由を確かめよう（以下、引用史料は旧字体を新字体に改め、句読点を適宜補った。史料中の〔 〕は引用時の注記である）。

われら行進曲の記録簿は、いよいよ八月八日西郷と中郷の握手によってここに完成することになった。吾々の高野から、黒潮の馬野路へ一本の露筋で導くことは、歴代幾年の苦難であつたことか、時止に、元一千六百年の佳き年に和歌山縣民におくられた最も記念すべき事業の一つともいふべきであらう。衆多の聖蹟を負する和歌山縣、躍進野を衣、示する太平洋の黒潮、これを唱へる「黒潮行進曲」正に最大の勲賞三連奏である、本社はその意味において次の規定で、これが歌詞を募集することにした。

【規定】 締切七月十五日 ▲時代精神をこめた歌詞であること ▲行進曲なること ▲版權本社所有 ▲応募作品は一切返送せず

【賞】 ▼當選歌 金三百圓（事業公債）佳

【選者】 縣知事 久米正雄氏、中村本社和歌山支局長

主催 和歌山縣・新宮市・大阪毎日新聞社

作一篇金五十圓（事業公債）

▼副賞 當選歌へ和歌山縣知事賞、新宮市長賞、和歌山市雜賀屋町東ノ丁三、大阪毎日新聞和歌山支局「黒潮行進曲」係

▼届先 清水和歌山縣知事、花田和高野校長、木村新宮市長、上田本社編輯部主幹、東日

図2 『大阪毎日和歌山版』1940年7月5日付より

われら待望の紀勢鉄道はいよいよ八月八日西線と中線の握手によつてここに貫通することになった、「雪の高野から黒潮踊る熊野路へ」一本の鉄路で連することは県民幾年の念願であつたことか、時正に「紀元二千六百年」この佳き年に和歌山県民におくられた最も記念すべき事業の一つともいふべきであらう、幾多の聖蹟を有する和歌山県、躍進熊野を表示する太平洋の黒潮、これを唱へる「黒潮行進曲」正に最大の祝賀三重奏である、本社はその意味において次の規定でこれが歌詞を募集することにした

こうしてようやく『黒潮行進曲』が生み出された理由を突きとめることができた。それはまず何よりも、紀勢線の「貫通」という和歌山県における一大ニュースの記念であった。ここで「貫通」（「全通」とも表現される）とは、紀勢西線（和歌山―江住）と紀勢中線（新宮―串本）が1940年8月8日の江住―串本、新宮―紀伊木本（熊野市）の同時開通によって一本に繋がったことを意味する（『日本鉄道請負業史 大正・昭和（前期）篇』）。そしてこのニュースが神武天皇の即位から2600年を迎えたとされる「紀元二千六百年」（昭和15年＝1940年）に重なったことも、祝賀ムードを高めることになった。広告の「規定」のうち、「時代精神をこめた歌詞であること」が求めたのは、「紀元二千六百年」への言及であつたに違いない。

3 『大阪毎日和歌山版』の関連記事

この『黒潮行進曲』の歌詞懸賞募集が大毎和歌山支局主導のメディア・イベントである以上、その経過は『大阪毎日和歌山版』紙上で逐一報道されることになる。表2は『大阪毎日和歌山版』に掲載された『黒潮行進曲』に関する記事をまとめたものである。

表2 『大阪毎日和歌山版』における『黒潮行進曲』の関連記事（1940年）

日付	見出し	備考
7月5日	黒潮行進曲歌詞懸賞募集	7月6・7日付にも掲載
7月7日	紀勢新線風景 黒潮行進曲前奏曲①	和深駅
7月10日	黒潮行進曲歌詞懸賞募集 珠玉の雄篇続々集まる 遠く四国、中国方面からも応募 締切は来る十五日	
7月10日	紀勢新線風景 黒潮行進曲前奏曲②	田子付近の切取りと鉄路
7月11日	紀勢新線風景 黒潮行進曲前奏曲③	田子浦付近より双島を望む
7月12日	紀勢新線風景 黒潮行進曲前奏曲④	串本近き袋港
7月13日	紀勢新線風景 黒潮行進曲前奏曲⑤	串本の干いか
7月14日	黒潮行進曲歌詞懸賞募集 全国から力作殺到 あすが愈よ締切り	

7月14日	紀勢新線風景 黒潮行進曲前奏曲⑥	新宮熊野川鉄橋とトンネル
7月15日	紀勢新線風景 黒潮行進曲前奏曲⑦	七里御浜国有林中の神志山駅
7月17日	紀勢新線風景 黒潮行進曲前奏曲⑧	七里御浜国有林一松トンネル
7月18日	紀勢新線風景 黒潮行進曲前奏曲⑨	七里御浜の夕映え
7月19日	黒潮行進曲歌詞懸賞募集 近く入賞作を発表 応募実 に六百卅三通に達す 盛況裏にこの程締切	
7月27日	黒潮行進曲当選歌詞発表 栄冠は先生で帰還勇士が獲得 作曲に着手、近く発表	
7月27日	県民の義務として応募 曾つてない感動を 西川好次郎氏喜びを語る	
7月27日	当選歌 西川好次郎	歌詞
7月27日	佳作 井戸徳夫	歌詞
7月28日	黒潮行進曲を讃ふ 極めて有意義 高らかに唱和せよ 知事清水重夫氏 熱望満たさる 新宮市長 木村藤吉氏 立派な作曲を 和歌山商工会議所理事 貴志二彦氏 全国に歌はれて欲しい 和歌山高商校長 花田比露思氏 立派な作品 和歌山県立図書館長 熊代強氏	
7月28日	黒潮を頭に浮べて そのまま歌に 佳作当選の井戸徳夫氏語る	
8月1日	黒潮行進曲作曲完成す 紀勢西、中線全通の八日に発表会 新宮市の熊野川原で 十日には和歌山市でも発表	
8月1日	黒潮行進曲 深海善次作曲	楽譜も掲載。深海は海軍軍楽隊の出身で、ビクターの専属作曲家
8月4日	“黒潮行進曲、当選の西川氏の表彰式 十日発表会席上で	
8月6日	黒潮行進曲発表 軍歌と民謡の夕 八日 新宮市熊野川原 (夕六時) 十日 和歌山市和中グラウンド (夕六時)	和歌山県庁・新宮市・大阪毎日新聞社・阪和音楽同好会主催

8月7日	黒潮行進曲 見事な出来栄え 音楽大行進予行演習	於・和歌山中学グラウンド
8月8日	黒潮行進曲発表 音楽大行進・軍歌と民謡の夕 十日 於和中グラウンド 夕六時 十一日 於浜寺大毎海水浴場 午後二時	
8月8日	黒潮行進曲 懸命に歌ふぞ 発表会で指導に当る ビクター歌手一行来和	
8月9日	全国に響けと大合唱 昨夕新宮市熊野川原で第一声 黒潮行進曲発表 軍歌と民謡の夕	
8月9日	黒潮行進曲 音楽の大饗宴 あす和中運動場で 予想されるその盛観	
8月10日	けふ 夕六時から 和歌山中学運動場で 黒潮行進曲 発表 軍歌と民謡の夕 各学校賛助出演音楽大行進	
8月13日	黒潮行進曲発表 軍歌と民謡の夕 三万人の大合唱 制服の乙女ら堂々の大行進 場を圧す万雷の拍手 和 中運動場を埋む 音楽の大饗宴	
8月13日	晴れの賞品授与式 当選者西川氏感激に双頬を紅潮 清水知事令嬢から歌手に花束を贈る	

歌詞の募集、応募状況、当選歌詞の発表、関係者のコメント、曲の完成、新宮市・和歌山市における発表会が連日にわたって報道される。その前半では「紀勢新線風景 黒潮行進曲前奏曲」が連載され、沿線の名所も紹介されていく。このように『黒潮行進曲』の誕生は、まさに企業としての大毎によって企画され、演出されていくイベントであった。

ここで西川の当選歌詞を掲げよう（出典は『大阪毎日和歌山版』7月27日付）。

【一】

蒼波〔あおなみ〕虹と噴き上げて 飛沫〔しぶき〕は歌ふ黒潮の
力捲〔ま〕きたつこの朝〔あした〕 あゝ南国の血に燃えて
行くぞ潮〔うしお〕の 彼方まで

【二】

皇紀栄えある悠遠の 光をここと照り徹る
聖地紀州の輝きや をどれ黒潮涇刺と
神代ながらの陽が昇る

【三】

浜木綿〔はまゆう、和歌山県花〕白く咲くところ 晴れて熊野に躍進の
息吹はこぞる波頭 見よ肇国の渚から
興亜の洋〔うみ〕は明け渡る

この歌詞のなかに紀勢線という言葉は登場しない。むしろ、「紀勢線」を用いずにその「全通」による和歌山の発展を謳っているところが、西川の巧みな作詞術なのかもしれない。一方で「紀元二千六百年」を連想させる言葉としては、「皇紀」「聖地」「肇国」などが散りばめられている。

西川自身のコメントもみてみよう（出典は前と同じ。当時、西川は日高郡川上村川原河小学校教諭）。

黒潮行進曲の募集に共鳴、感動しまして実に興亜日本におくる世紀の旋律を任じて筆をとりました、〔中略〕募集が全国的であるだけに入選などはむろん考へてなくただ応募することが県民の義務であると信じて応募した次第でした、幸ひ入選の光栄に浴し躍進南国の息吹きに盛られて歌はれるかと思ふとかつての経験以上の感動を覚えます

「応募することが県民の義務」という言葉からは、彼なりの自負がうかがえる。その自負は、「かつての経験」に裏付けされたものであったと思われる。ここでいう「経験」とは、西川が「皇太子殿下御降誕奉祝歌〔報知新聞社が募集〕をはじめ戦線将兵感謝の歌〔北支那方面軍報道部・東亜新報（北京）が募集〕など十数篇の一等当選者で本社〔大毎〕が昭和十一年に募集した〔ベルリン〕オリンピック応援歌にも三万余の応募者中第二席〔『大阪毎日新聞』1936年2月11日付朝刊によると佳作〕に入選した」ことなどを指す。また、西川は日中戦争で中国大陸に「出征中に“長江を征く”、“漢口晴れて”、“九江小唄”などを作つて前線勇士をはじめ銃後の人々にも口ずさまれてゐた。そのため、彼は地元で「小唄の先生」、戦地では「唄の軍曹」と呼ばれていた。西川はアマチュアながらも、作詞家として十分な実績を備えていたのである。

そして、この歌詞に曲が付けられ、紀勢線の「全通」に合わせてお披露目のイベントが開催された。8月8日の新宮市におけるイベントは二部構成を採った。第一部ではビクター歌手の波岡惣一郎らが『黒潮行進曲』を披露したのちに、波岡が来場者に同曲の歌唱を指導した。つづく第二部では歌手らが軍歌・民謡を独唱し、さいごに来場者全員で『黒潮行進曲』を「大合唱」した（8月9日付参照）。8月11日（雨天のため10日から順延か）の和歌山市におけるイベントでは地元の各学校の児童・生徒らによる音楽行進、西川への賞品授与式ののちに演奏会が始まった。演奏会では、第一部でビクター歌手による『黒潮行進曲』の披露と歌唱指導、第二部で児童・生徒らによる軍歌の合唱など、第三部でビクター歌手による歌謡曲の独唱など、さいごに来場者「三万人の黒潮行進曲大合唱」が行われた（8月13日付参照）。

このように『黒潮行進曲』をめぐる一連のイベントは、最終的に相当数の和歌山県民（そこには大毎の購読者はもちろん、非購読者も含まれるはずである）を動員したという意味で成功を収めたといえるだろう。とはいえ、1940年に紀勢線の「全通」というニュースをメディア・イベント化したのは、大毎だけではなかった。大阪朝日新聞社（大朝）は、「紀元二千六百年奉祝 紀勢線全通記念」として和歌山通信局主催の三事業、すなわち「郡市青年対抗駅伝競走」（和歌山―新宮間）、「鉄道展覧会」（於・新宮市公会堂）、「皇軍将士慰問作文

と図画募集」を実施している（『大阪朝日和歌山版』1940年8月3日付）。大毎と大朝は新聞の販売だけでなく、メディア・イベントにおいても競合関係にあったのである。なお、和歌山の地域紙『和歌山新聞』『和歌山日日』上に、自前のメディア・イベントは見当たらなかった。

4 今後の課題

それでは、『黒潮行進曲』の誕生は、戦時下の和歌山にあって紀勢線の「全通」という明るい話題に花を添えた、とまとめてしまってよいのだろうか。

ここで改めて戦時という時代性を意識したい。『大阪毎日和歌山版』には「輝く忠魂」という欄がしばしば現われる。これは和歌山出身の兵士たちの戦死を伝える訃報記事である。このような訃報記事と『黒潮行進曲』の記事は、同じ紙面に掲載された。これは当時の『大阪毎日和歌山版』が1面で構成されていたことによる。「輝く忠魂」のなかでも、7月14日付（那智町出身・中支戦線のY上等兵、伊都郡出身・北支戦線のI一等兵、同郡出身・中支戦線のT上等兵）、8月6日付（海南市出身・南支戦線のM上等兵、東牟婁郡出身のY上等兵）、同月7日付（和歌山市出身・中支戦線のT伍長）の記事は、それぞれ「全国から力作殺到」「軍歌と民謡の夕」「見事な出来栄え 音楽大行進予行演習」の記事（表2参照）のすぐ近くに掲載されていた。このように紙面が限られていたために、戦死の記事とイベントの記事が近接しえたことにこそ、地域のメディア・イベントの特性が表れているように思われる。その効果として、多数の戦死者が出ているなかで自分たちはお祭り気分になり、『黒潮行進曲』を歌っていてよいのかということ、読者は人情として感じざるをえない。

そうであるなら、大毎は紀勢線の「全通」を祝福するメディア・イベントと、戦争や県民の戦死という事態をどのような論理や方法で整合させようとしたのだろうか。この問題を明らかにするためには、『大阪毎日和歌山版』や周辺史料のさらなる調査が必要となるだろう。今後の課題としたい。

参考文献

- 和歌山県立文書館所蔵『大阪毎日和歌山版』『大阪朝日和歌山版』
西川好次郎『山びこよ雲にのれ』（「山びこよ雲にのれ」刊行委員会、1985年）
細川周平・片山杜秀監修『日本の作曲家—近現代音楽人名事典』（日外アソシエーツ、2008年）
毎日新聞百年史刊行委員会編『毎日新聞百年史』（毎日新聞社、1972年）
『日本鉄道請負業史 大正・昭和（前期）篇』（日本鉄道建設業協会、1978年）
吉見俊哉「メディア・イベント概念の諸相」（津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996年）